



目覚めのキッス

スマートウォッチを買った。スマートウォッチとは、腕時計型の、手首に着けるちいさなスマートフォンのような液晶端末のことだ。仕事を辞めて専業主婦としてとりあえず一年やってみよう、と発起してまず先に気が付いたことは「このままでは運動不足が祟ってあつという間に不健康になる」ということだった。まる一日部屋の中にいて唸ってほんど動かないのだ。

万歩計代わりにスマートウォッチを買うべき、というのが同居する恋人の意見だった。わたしは最先端のものがこわいという理由で無線イヤホンなども使わずに暮らしているの、スマートウォッチなんて使いこなせる自信がぜんぜんなかった。恋人は「アップル

ウォッチほど高価で最先端のものを買う必要はない」と言った。どうせ使いこなせないのだから万歩計機能と時計の機能がついている安いやつで十分だと。それで購入を検討しているころ、友人がつけていたスマートウォッチがとても華奢なデザインで、しかも四千年だという。使いやしくおすすめたという「Oppo」という機種のもの。いますぐ送ってほしいとアマゾンの「PR」をねだり、その場で購入した。

「えっ、ほんとに買ったの？」

「うん、たつたい買った」

「あなたは行動力の人だね」

「わたしもそう思う」

その翌々日に家に届いた。そうしてわたしのスマートウォッチとの生活は始まった。人差し指の第二関節ほどの大きさの液晶は金のふちで守られていておしゃれでかわいい。歩数と時間のみならず、血中酸素濃度、心拍数、天気、メッセージの通知など思いのほか機能が多く、想像以上にシンプルで扱いやすい。通知や時間を見ようとしてスマートフォンの触る時間が減ったので、仕事にも集中しやすくなる気がする。一日八千歩あるくと「ぶるる」と振動して「一日の歩数を達成しまし

た！」と教えてくれる。ありがたく、やる気になる。原稿に追われて一歩も外に出ない日などは一日の歩数が五百歩ほどになる日も多かった。

手首で歩数を表示するようになってからは、別に今日でなくてもいい買い物も歩数のためになしてみようか、とか家の目の前に郵便局があつても遠いポストに投函してみようか、とか、みる「歩こう」という意識が芽生えているのがわかりおもしろい。この頃はほぼ毎日八千歩を達成している。機能には万歩計のほかに走るモードやヨガのモードや水泳のモードもある。このままみるみる健康になつてしまう気がする。

しかし、スマートウォッチを買つてよかつたと思うのは実は万歩計以上にアラームの機能だった。定刻になると腕に着けられたスマートウォッチが「ぶるるる」と震える。それで起きる、という仕組みになつている。そう。つまり寝ている間もスマートウォッチを腕に着けるのだ。はじめは（寝ている間も時計をつけたまままだなんてそんなのあまりにも現代人すぎてぜつたいにいやー）と思つていた。しかし恋人がスマートウォッチに変えてから、

けたたましい音量のアラームを鳴らさなくなり、しかもいままで消しては二度寝していたのが、魔法でもかけられたかのように、すんつ、と起きるのだ。

どんなもんか一度体験してみようとためしに着けながら寝てみると、その寝起きの爽快さたるや！ 耳元でフライパンを鳴らされて起きていたようなうるささと不快さから、小鳥がついて起こしてくれるようすがすがしさに変わったのだ。それからはもう病みつきになって、お風呂に入る以外の時間わたしはほとんどこのスマートウォッチを身に付けている。

ある朝、また「ぶるるるるるる」とわたしの手元が震えた。六月とは思えないような暑さの朝だった。いつもは画面を見て、人差し指で触れて止めていたのだが、その日はあまりにぐったりとしていたから「うーん」と言いながら両腕を曲げて顔を覆った。すると、びたり、とアラームが止まった。スマートウォッチの画面がたまたまくちびるに触れたのだった。(キスで止めた！) と思った。「キス」よりも「キッス」というニュアンスのほうが近いと思った。目覚めのキッスでアラームを止める。なんだかセクシーすぎてお

かしくて笑った。それからというもの、毎朝わたしは手首にキッスをして、(ああ、なんてわたしはセクシーなのかしら) と思いながら起床している。

(王藤 玲音)

みんなスズメ

短歌をはじめの前は、みんなスズメだった。淀川の河川敷で見つけたカワラヒワ、ホオジロ、ホオアカ。万博公園のアトリ、ベニマシコ。大阪城のアオジなどはすべてみな。スズメでなんの不都合もなかった。ツバメ、カラス、ハトが区別できれば、なにも困らない。長くそんなふうに暮らしてきた。

ところが、探鳥会の人指差す先には、たくさんの鳥がいた。それも身近に。驚きだった。双眼鏡のレンズの奥の鳥の胸は赤だったり黄だったり、翼に黄の斑があったりする。くちばしもピンクだったり黒だったり。耳をすますと、鳴き方がぜんぜん違うことに気づく。チュンチュンとばかり鳴かない。みんな違う鳴き方をする。体の長さも形も微妙に異なる。今まで頓着せず、みんなスズメと思っていた。

しかし、意識して見ると色々な種が

いて個性豊かな世界が広がっていることがわかる。知らなくては損だという気になる。鳥の名前を覚えると、その鳥にまた会える。見つけやすくなる。新しい鳥に出会うと感動があり、それを何とか短歌にしようとしてきた。そんな自分をおもしろいと思うことがある。小さな鳥は私をおもしろくしてくれる。

ところで、ICBTの問題がある。

これも知ろうとしないと理解できない。トランスジェンダーだという人の講演会でかけてみて、性は多様であり違って当たり前と教えられた。本当の苦しみはわからないけれど、理解はすすむ。十把ひとからげにはなく、こまかく知る必要があると思った。教師を職とする子にこのことを話すと、子どもその人の公演を聞いたことがあるというから、なぞ驚いた。

先日とうとう決心して、探鳥会に入会した。準会員のむくどり会員である。参加した理由は、身の回りにいる鳥のことをもっと知りたいと思ったからである。何よりも小さな命を追いかける人たちが気に入ってしまった。しかし、鳥を追って、一日歩き回るのはつらいことである。参加すれば必ずふらふら

になる。締めくくりの鳥合せが終わるとふっといつも息をつくのである。

(桑原 博)

『無名碑』から届くもの

息子の病気が分かったのは四歳の時で、当時、日本で二例目という稀な疾患であった。先天性無ガンマグロブリン血症。彼は生後半年位から現在に至るまで、百回を超える肺炎や様々な病と闘い、打ち克ち、乗り越えて生きてきた。難病の息子を守りながら生きることは、まだ若い私にとって抱えきれないほどの苦しみであった。

幼少期の息子は、一年の殆どを病院で過ごし、そのため私は病院に泊まり込んで付き添い続けなければならなかった。当時の病院は付き添いの者のための設備も整っておらず、院内に売店もない。私は食事も碌に摂らず、何晩も丸椅子に座って眠った。朝、目が覚めると椅子から転げ落ちて床で寝ていたこともある。稀少難病であるため、治療法も確立されておらず、恢復も、この暮らしの終わりも見えず、私は疲弊しきっていた。

その中に在って道標となつたのが、

曾野綾子の『無名碑』、そしてその根幹にある『ヨブ記』の思想であった。

『無名碑』は或る男の過酷な運命を描いた小説である。主人公の建設技師の三雲竜起は、一つのダムの現場が終り東京へ帰る途中の列車の中で、二人の女性と出会う。そして損を承知で斃のある女性を選び結婚する。一女に恵まれたものの先天性の心臓病により、手術目前の検査中にその娘は亡くなり、やがて精神を病んだ妻に赴任地のタイで刺されて竜起は命を落とす。

初読の際、私には分からなかった。何故、竜起はこのような辛い死を迎えねばならなかったのか。私はこの物語を受け容れることができず、本棚の目立たない所に立てておいた。

『無名碑』への見方が変わったのは、竜起にモデルがあると知ったときからである。それは旧約聖書の中の「ヨブ」なのだという。ヨブは「ヨブ記」に登場する男。彼は非常に敬虔で裕福であった。しかしサタンは神に対して彼の敬虔さが単に彼の物質的繁栄に基づくものだと言張し、彼から財産、子どもたち、最終的には彼自身の健康をも奪ってしまう。そして、神はその収奪を認める。しかし、そのような目に

遭ってもヨブは神への忠節を捨てず、「私は裸で母の胎から出た。また裸でかしこに帰ろう」と言う。

曾野は『仮の宿』に於いて何故竜起のモデルがヨブであったのか、竜起に何を託したかったのかを記している。

「私は安心してこの世の不合理を承認出来迷えるような気がしました。真理はこの世でかたがつくものではない、この世で答えが出るものではない。かたもつかず、答えも出ず、評価もされないからこそ、私たちは死にも狂いで、そのことについて悩み考えるのです。これが神の謀略です。そしてすぐに答えと評価が出るような現実には私流の言い方をすれば、どこかちやちな感じがして仕方がなかったのです」

私は大きな衝撃を受けた。この記述を通じて初めて、過酷な運命と理不尽な死を背うことができるという境地を知ったのである。大袈裟な表現をすれば、人生観が変わったのだ。眼前の重い扉が力強く開かれたように思えた。自身に起こる出来事を黙々と受け止め、忍耐強く生きる。報われることを目的とせず、身巡りの不遇に屈せず、進むこと。ヨブを下敷きにした竜起の生き方を理解することで、私は今、何か悪

いことをして罰を受けているのでもなく、懲らしめを受けているのでもない、と信じるのが出来るようになった。

難病の息子を抱え途方に暮れる日もある中、幾度も『無名碑』を読んだ。

隅に置いていた筈のこの本は、いつのまにか本棚の中心にあった。

今、息子は五十五歳である。『無名碑』は私の胸の深くから、力を送り続けてくれている。(島本 敏子)

かばんと位牌

母の家と百メートルほど離れて暮らす姉から、こんな電話があった。

「母さんから電話があつて、預金通帳や年金証書の入った黒のかばんがないと言うの。すぐに行つて捜したけど見つからなくてね。明日また捜そうつて帰つてきたのよ。しばらくするとパトカーが来てると、お隣さんから連絡があつて、びっくりして飛んで行つたら警察官が二人家に来て、『通報がありましたので、事情を聞きにきました』つて。母さんに問い詰めたら、『泥棒に入られたんじゃないかと相談したら』と泣きそうな声でね。結局かばんは見つからなかったんだけど、その夜

『ソファアの隙間にあつた』つて言うの。翌日、駐在所に謝りに行つたら、よくあることですつて。大らかな対応でほつとしたけど、ひとり暮らしはもう無理だと思つて施設を探したら、ちようど入所できる場所があつたんだけど、いいかしら」

やがて母は市営の老人施設に入所が決まつたが、すんなりというわけにはいかなかった。地域のカラオケ教室に行かなくなると拗ねた。発表会の衣装も準備してはりきつていたし、友達と別れることや、環境が変わることが不安で寂しかったんだらう。

その気持ちはよくわかるが、この機を逃したら何年も待たなければならぬ。それは困る。施設は快適で家事や雑事もないからと、姉と妹が毎日顔を出すからと、最後は懇願して渋々承諾してもらつたという。

ところが入所するとまもなく友だちもでき、思いのほかスムーズに施設の暮らしに溶け込んだらしい。約束どおり姉は話し相手に、妹は洗濯や片付けに通つたようだ。そして十年近くそこでお世話になり、雪の降る三月初めの日、母は九十二歳で他界した。

葬儀のあと千歳空港に直行し、私は

飯田に戻つた。その夜のこと。荷物もそのままに足を伸ばしていると、姉から電話があつた。

「母の位牌を持っていかなかった？」

葬儀屋さんが位牌を二つ用意してくれ、一つは一緒に火葬し、もう一つはお骨と共に持つて帰るはずだった。それが無いと言う。葬儀会場の人たちも手分けして捜してくれた。車の中、会場の隅々、出入り口付近の雪の中まで。だがもう一つの位牌がどうしてもみつからなかったと言うのだ。

「私が持つて行くわけないわよ」と電話を切つたが、しかし待てよとキャリーバッグを開け衣類を広げてみたらなんとまあ、あるではないか。喪服の間に位牌が……。なぜ持つてきたのか、全く覚えがない。

母は陽気な人だが恐がり屋でもあつた。幸い、東日本大震災もコロナ禍も知らずに逝つた。先の戦争を知っているから、恐いことはもう十分であろう。それより、母が笑つてしまうようなおかしなことをたくさん思い出して、供養したい。

まもなく十三回忌がくる。

(今村日出子)